

4 3 Pearly shells

Pearly shells(真珠貝)はハワイアン・ソングで古くから歌われ、フラダンスを踊るときに演奏されるなど、ハワイでは大変親しまれているそうです。砂浜で美しく輝く真珠貝だけでなく、それよりも私は貴女のことが大好きです、といった内容のラブソングです。

Pearly shells, from the ocean.
Shining in the sun, covering the shore
When I see them
My heart tells me that I love you
More than all the little pearly shells.

For every grain of sand upon the beach,
I got a kiss for you.
And I've got more left over, for each star
That twinkles in the blue.

真珠貝、海からやって来た
太陽に輝いて、砂浜を被う
でも真珠貝を見ると
私はあなたのことが大好きなのだ、と気づく
この全ての真珠貝を集めたよりもずっと

海岸に敷きつめられた全部の砂粒に向かって
私はあなたのためにキスをした。
そして夜空にキラキラと光る星々にも
もっと沢山のキスを残した

日本語訳：宮崎多加雄

42 Moon River

Moon river は、1961年に製作された、映画 "Breakfast at Tiffany's" のテーマ音楽としてヘンリー・マンシーニが作曲し、ジョニー・マーサが作詞したもので、主人公、ホリーを演じるオードリー・ヘップバーンがギターを弾きながら歌って一躍有名になりました。

そして、この歌はこの年のアカデミー賞主題歌賞を受賞しました。

Moon river, wider than a mile
I'm crossing you in style some day
Oh, dream maker, you heart breaker
Wherever you're goin', I'm goin' your way

Two drifters, off to see the world
There's such a lot of world to see
We're after the same rainbow's end, waitin' 'round the bend
My huckleberry friend, moon river, and me

ムーン・リバー、大きくて広い河
いつか私は堂々とお前を渡ってみせる
私に夢を与えてくれたのはお前
そして夢をこわしたのもお前
お前が何処に流れて行こうとも、私はついて行く

二人は、世界を知ろうと故郷を離れた、放浪者
知りたい世界はたくさんある
私たちは同じ虹の端っこを求めて*
ちょうど曲がり角の辺りで待っている
幼なじみの仲間、ムーン・リバーと私。

* pot of gold at the end of the rainbow, このアイルランドの民間伝承が出典と思われませんが、虹の端っこには金の壺のような素晴らしいものがある、と云う譬えのようです。

日本語訳：宮崎多加雄

1. この歌の起源

これは一人の水夫から金品を盗んで捕まった *Maggie May* という名のストリートガールの事を唄ったリバプールのフォークソングです。スタン・ヒューギルは彼の著書の中で次のように述べています。“*Maggie May* が誰で、いつ何処に住んでいたかは分からないらしい。けれども、実在した女なのか架空の女なのかは問題ではない。彼女が嘗て自分たちも共にしたことがある船乗り相手の女であることは察しがつく。どうも彼女はしょっちゅう盗みを働いたようだ。そしてお巡りに捕まり、植民地に追放された。この歌は当時多くのリバプール船でキャプスタンの作業をする時に唄われた。”

2. 英語の歌詞と日本語訳

Come all you sailormen an' listen to my plea,
 When you've heard it you will pity me.
 For I was a goddamn fool in the port of London pool
 On the first day me barge came from sea.
 I was paid off at Green hithe from a voyage from north of Blyth,
 And four pounds ten a month it was my pay,
 And as I jingled with my tin I was very soon taken in
 By a pretty girl, they called her *Maggie May*.
 Well do I remember where I first met *Maggie May*
 Cruisn' up and down Woolwich place.
 She wore a crochet fine like a frigate on the line like a bargeman I gave chase.
 I caught her all a back she shifted her main tack,
 But *Maggie* she had busted her main stay,
 And next morning when I woke with me heart just sore an' broke.
 Cos *Maggie* had skedaddled with my pay.
 And that morning when I woke
 No shirt, no pants, no waistcoat could I find.
 I wrote for where they were. She replied:
 "My dear Sir, they are down in Ips-wich pawnshop number nine."
 To the pawnshop we did go but I could not find my clothes,
 So a bobby came and took the girl away,
 And the judge he guilty found her,
 For the robbin' of a homeward bounder,
 And he paid her passage back to Butter-man's Bay.

 O *Mggie*, *Maggie May* they've taken you away toil upon that demon troubled shore,
 Cos you're robbed so many sailors
 An' you've done so many whalers
 But you'll never see the 'Riga' anymore.

注) Blyth: (ブライズ)、イングランド北部の港。Woolwich (ウリッジ)、Greater London 南東部の一地区。
Crochet: クロッシェ編み。Ipswich (イプスウィッチ)、イングランド Suffolk 州南東部の都市。
Greenhithe (グリーンヒズ)、Thames 河畔沿いの村。Skedaddle、あわてて逃げる。

さあ、みんなここに来て俺の話聞いてくれ。
この話を聞いたら、お前は何て気の毒な奴だと思っただろう。
何故かって、俺はリバプールの港で全くバカなことをした、
海から帰ってきた最初の日に。
ブライズの北からの航海を終えてグリーンヒズで給料を貰った。
4ポンド10ペンスだった。
そして俺が小銭をチャラチャラ鳴らしていると
間もなく、一人のべっぴんの女に騙された。
みんなはその女をマギー・メイと呼んだ。

そう、俺はマギー・メイに初めて逢った処をよーく覚えてる。
彼女はウリッジの街を客を拾うため行ったり来たりしていた。
上等なクロッシェ編みのコートを着て、航路上の護衛艦のように。
彼女は俺が船乗りだと判ったので、俺は追いかけた。

俺は彼女をつかまえた。彼女は態度を変えた。
しかし、彼女は大事な滞在を台無しにした。
翌日目が覚めると俺は文無しだった。
マギーの奴が俺の給料を持って逃げたのだ。
おまけにシャツもズボンもベストも見当たらなかった。
俺は手紙で何処へやったのか聞いた。彼女は答えた：
ねえ、お兄さん、衣類はイプスウィッチの質屋#9にあるわ。
早速、2人でその質屋へ行って見たが、俺の衣類はなかった。
やがてお巡りが来て彼女を連れていった。
判事は彼女に有罪を宣告した。我が家へ帰る船乗り達から金品を奪ったかどで、
そして彼女にバターマンズ湾への片道の船賃を払った。

(Chorus)

おオ、マギー、マギー・メイ、連中はお前を連れて行ってしまった。
あの悪魔の住む地で苦役に服するために、
それもお前が余りにも多くの船乗り達を食い物にしたからさ、
お前は二度とリガに戻ることはないだろうよ。

参考文献: Shanties from the Seven Seas、collected by Stan Hugill

解説・日本語訳: 宮崎多加雄

帆船日本丸男声合唱団用資料

冊 9-110

30 *The Water Is Wide*

1. この歌の説明

元は "O Waly, Waly" と云う英国の歌で、後に若干の変更をして1800年代に現在の "The Water Is Wide" になったそうです。

2. 日本語訳

O the water is wide, I can't swim o'er,-
And neither have I wings to fly,
Give me a boat that can carry two,-
And we shall load, my love and I.

おお、海は広い、私にはとても泳いで渡れない
それに羽がないから飛ぶこともかなわない、
二人を運んでくれる船が欲しい、
そうすれば恋人も私も共に乗り込んでいくよ。

There is a ship and she sails the sea,
She loaded deep, as deep can be,
But not as deep as the love of thee,-
I know not how, I'll sink or swim.

一隻の船がある、そしてこの船は海を渡る、
船は可能な限り荷を積んで、喫水は深くなった、
でも君の愛ほど深くはないさ、
私は沈むのか泳ぐのかわからない。

For love is gentle and love is kind,-
The sweetest flower when first it's new,
But love grows old and waxes cold,-
And fades away like morning dew.

愛は優しくて親切だ、
はじめ、新鮮なうちは、とても香のよい花の様に、
けれども愛は年を重ね、次第に冷めてくる、
そして朝露のように消えていく。

O the water is wide , I can 't swim o'er,-
And neither have I wings to fly,
Give me a boat that can carry two,-
And we shall load, my love and I.

おお、海は広い、私にはとても泳いで渡れない、
それに羽がないから飛ぶこともかなわない、
二人を運んでくれる船が欲しい、
そうすれば恋人も私も共に乗り込んでいくよ。

解説・日本語訳：宮崎多加雄

26 *Blow the man down*

(Revised)

1. この歌の歴史的背景

この歌にはちょっとした歴史があります。すなわち19世紀後半に **Black Ballers** という高速定期船がニューヨークとリバプール間を就航していました。何でもイギリスを出発してから4週間以内にアメリカに到着し、帰りの航海は通常3週間で切る早さだったそうです。船乗り達にとっては船足が速ければ速いほど、その船の航海日数は短縮される為、それだけ早く給料をもらうことが出来ました。ですから、当然の事ながら船乗りの多くはこの船足の速いクリッパー船に乗ることを希望したそうです。

一方、当時の船乗り達の船上での生活はムチによって厳しく規律が守られていました。

そして不幸なことに **Black Baller** の船長達は揃いも揃って特別残忍なことで有名でした。ある船乗りは、仲間の一人が殴打されたという時はそれが地面に叩きのめされたことを意味するんだ、と言っています。この "**Blow the man down**" の歌はこれらの船の甲板上で、船乗り達が不当に叩かれる様子を歌ったものと説明しています。"**Blow**" は拳や綱止め栓、あるいはキャプスタン棒を使って仲間を打ちのめすことを言っているのだそうです。このような厳しい刑罰が課せられた理由としては、船上での生活が極めてハードであったこと、それを生き抜くためにはかなりのタフネスさが要求されたこと、又士官達には船上での厳しい規律を船乗り達に課すことで高いモラルを維持し、同時に反乱を防ぐことが目的であったようです。因みに、この歌は *Halyard shanty* (帆・旗などの上下索) です。

2. 歌詞の日本語訳

奴を打ちのめせ

おー、奴を打ちのめせ、おまえ達、奴を打ちのめすのだ、
俺のやり方に従って、奴を打ちのめせ、
おー、奴を打ちのめせ、おまえ達、奴を叩き出せ、
奴を打ちのめすのに少し時間をくれ。

おー、使いものにならない奴らは去った、
そしてぶたばこはぎゅうぎゅう詰めさ、
俺のやり方に従って、奴を打ちのめせ、
そして船長は言うんだ、"天候に注意を払え" とね、

おー、奴を打ちのめすのに少し時間をくれ、
そうだ、奴を叱りとばして、打ちのめしてやれ、
俺のやり方で奴を打ちのめせ、
そして奴をリバプールの街に吹き飛ばせ、
おー、奴を打ちのめすのに少し時間をくれ、

解説・日本語訳：宮崎多加雄

23 Leave Her Johnny, Leave Her

1. この歌の時代背景

“Leave Her Johnny”の“Her”は、女性のことでなく、船のことを指しています。

このシャンティは、船内のアカをポンプで汲み出すための最後の仕事で、船がドックに入った後、港に停泊しているとき、伝統的に歌われました。従ってポンピング・シャンティとも呼ばれています。しかしそれは又、船乗り達が積み積もった、日頃の鬱憤をはらす目的としても、役目を果たしました。それ故に、この歌は航海のいちばん最後に歌われました。

Stan Hugillは、この歌の起源を”Across The Rockies”と言う、ウエスタン・オーシャン・パケット（定期船）の船上で歌われていたシャンティに求めています。

2. 歌詞の日本語訳

俺は、船長が“船を去れ、ジョニー、船を去れ”と云っているのを聞いたと思った。

“明日、お前は給料をもらえるんだ”、とも、

“俺達には、船を去るいい潮時だ”、

“船を去れ、ジョニー、船を去れ”、

“船を去れ、ジョニー、船を去れ”、

“明日、お前は給料をもらえるんだ”、

“俺達には、船を去るいい潮時だ”、

“ああ、仕事はきついし、給料は安い”、

“船を去れ、ジョニー、船を去れ”、

“俺は荷物をたたんで、下に降りるよ”、

“俺達には、船を去るいい潮時だ”、

“さあ、船を去れ、ジョニー、船を去れ”、

“船を去れ、ジョニー、船を去れ”、

“俺は荷物をたたんで、下に降りるよ”、

“俺達には、船を去るいい潮時だ”、

“帆は巻いたし、俺達の仕事はおしまいだ”、

“船を去れ、ジョニー、船を去れ”、

“船を去る前に、みんなで歌を歌おうじゃないか”、

“俺達には、船を去るいい潮時だ”、

“さあ、船を去れ、ジョニー、船を去れ、船を去れ、ジョニー、船を去れ”、

“船を去る前に、みんなで歌を歌おうじゃないか”、

“船を去れ、ジョニー、船を去れ”、

“船を去れ、船を去れ、船を去れ、ジョン”、

22 The Boston Come-All-Ye

1. この歌の時代背景

この歌のオリジナルは、“Blow Ye Winds In The Morning ” で、時に“The Boston Come-All-Ye”(Come all you bold Americans, a-whalin' for to go のフレーズで始まる) と呼ばれるそうです。しかし、この二つの歌詞は内容がかなり異なっていて、私達の手元にある“The Boston Come-All-Ye”のヴァージョンは、むしろ“Song Of The Fishes ”や“The Fish Of The Sea ”の名で知られる、シャンティと大変よく似ています。

その“The Fish Of The Sea ”について、Shanties from Seven Seas の著者であるスタン・ヒューギルは、これはキャプスタン・シャンティで、元々はスコットランドの漁夫の歌として始まったのだと解説しています。更に、アメリカの北東部マサチューセッツ州にあるグロスターと言う港町でも、この歌は当時、大変流行ったと語っています。

内容は、一人の漁船の船長が若い船乗り達を集めて、彼等の前で海の魚の歌を歌って聞かせ、海で働く楽しさを宣伝したものです。登場する魚たちが擬人化されていてコミカルです。又、船乗り達は、歌詞にムツ、うなぎ、鰯、平目など、さまざまな魚を登場させ、必要なだけ歌の長さを調節しながら、歌ったようです。

件の“Blow Ye Winds In The Morning ”の方には、冒頭に捕鯨に繰り出す500人の勇敢なアメリカ人達を集めるために、ボストン、ニューヨーク、バップアローにおいて宣伝した際の歌であることが記されています。

従って、“The Boston Come-All-Ye ”(来たれ、すべてのボストンの男達よ) も、この題名から推察できるように、捕鯨船員を集めるために歌われたものと思われます。

因みに、ボストンはマサチューセッツ州の州都であると同時に、周辺にニュー・ベッドフォード、ケープコッド、ナンタケット、ロードアイランド等、当時の代表的な捕鯨基地を有していた為、多くの人が集まる格好の場所でした。前述のグロスターも又、ボストンのやや北に位置する港町であったことを考えると、この歌がこの場所で流行ったのも納得できそうです。

註) 1. The Boston Come-All-Ye の Ye は、You の意。

2. Blow Ye Winds の Ye は、古英語で The の意。

2. この歌の日本語訳

(コーラス)

更に、風は西へ、西へと吹いている、
私達は南の方へ向かっているところ、船が安定した航行をするように、
ラ、ラ、ラ、

さあ、君たち若い船乗り達よ、私の云うことを聞いてくれ、
私は君たちに魚の歌を歌って聞かせよう、

(コーラス)

おお、最初は鯨のお出ました、魚の中で一番大きな奴よ、
奴はマストのてっぺんに登って、帆という帆をみんな下ろさせた。

(コーラス)

お次はサバの登場だ、背中に縞のある奴よ、
こいつは帆脚索を船尾の方へ引っ張って、間切りした、

(コーラス)

それからイルカの登場だ、短い鼻ズラをした奴よ、
こいつは舵輪の所へ行って、“上手回し、用意！”なんて命令した、

(コーラス)

おお、お次はワカサギの登場だ、魚の中で一番小さな奴よ、
奴は船尾楼に飛び上がったと思ったら、“トップセールを引け！”を
大声で歌い出した、

(コーラス)

註) 間切り：風を斜めに受けて、船を風上にやること。

解説・日本語訳：宮崎多加雄

帆船日本丸男声合唱団用資料

№ 5-065

2 Sailing, Sailing

Sailing, Sailing over the bounding main,
For many a stormy wind shall blow ere Jack comes home again,
Sailing, Sailing over the bounding main,
For many a stormy wind shall blow ere Jack comes home again,
And Sailing, Sailing over the bounding main,—
For many a stormy wind shall blow ere Jack comes home again.—

Sailing, Sailing over the bounding main,—
For many a stormy wind shall blow ere Jack comes home again.

Oh!—Heave ho!—my lads,—the wind blow free,—
A pleasant gale is on our lee,—
And soon across the ocean clear
Our gallant barque shall bravely steer.
But ere we part for freedom shore tonight,
A song we'll sing for home and beauty bright.

Then here's to the sailor and here's to the soldier, too.
Hearts will beat for him on the water blue.
Sailing, Sailing, Sailing, Sailing,
Heave ho! my lads, heave ho!
Sailing, Sailing over the bounding main,
For many a stormy wind shall blow ere Jack comes home again.

Sailing, Sailing over the bounding main,
For many a stormy wind shall blow ere Jack comes home again.

[日本語意識]

さあ、出帆だ、出帆だ、波踊る大海原の彼方へ向けて、
ジャックが故国に戻る前に、嵐のような風がたっぷりと吹くだろう。
さあ、おまえ達、ロープを引っ張ってくれ！風は追い風だ。
打ってつけの強風が俺達の風下にはある。
それに海は直にすっぽりと晴れ渡るだろう。
俺達の格好いいバーク船は果敢に舵を取ってくれるだろうよ。
が、今晚自由の地へ向け航海する前に、祖国と快活な美人のために
歌をうたおうじゃないか。
それから水夫や兵士達のためにも乾杯といこう。
真っ青な海の上で彼の胸は高鳴るだろう。

日本語訳：宮崎多加雄

Barbary Coast について、

Barbary Coast は、エジプトの西部国境から大西洋にかけて伸びている、北アフリカの海岸地域を指します。名前の由来は、この地域の先住民である Berber 人から取ったものだそうです。

16世紀から19世紀に架けて、この海岸地域一帯は、オスマントルコの主権下にあつていくつかの独立したイスラム教国家によって、占められていました。これらの Barbary 国家（リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ）は1500年代初めから、地中海、北アフリカ沖で大規模な海賊行為を行って、悪名を馳せていました。

彼らの Corsairs（私掠船）はキリスト教国の船舶の略奪をしたり、時にはイタリー、フランス、スペイン等の海岸沿いの町を襲ったりもしました。略奪した船舶や船荷は売り飛ばされ、船客や乗組員は人質にされて、身代金を要求されたり、奴隷として売られたりしました。"The coast of High Barbary" の Sea Shanty は、こうした時代背景の中で、勇敢な船長が乗り込む2隻のイギリス帆船が海賊船に遭遇しながらも、これをうち倒し、果敢に大西洋を南下する様子を歌ったものと思われます。

（註）ブローデルの“地中海”にも、当時の北アフリカ沖での Barbary Pirates の活躍の様子が描かれております。

解説：宮崎多加雄

8 The Coast Of High Barbary

I この歌の時代背景

アルジェリアのアルモハド帝国の滅亡は、権力の空白を作った。そしてそれは、バーバリー・コーストとして知られるようになった、海賊の出現に繋がった。この海岸に面した諸都市は、私掠船を雇って、公海上に於いて貿易の激しい競争の中で商船を捕らえ、利益を得た。1801年まで、アメリカとイギリスはこれらの海賊船から、商船の自由な航行を保証してもらうために、北アフリカの4つのバーバリー諸国（アルジェリア、モロッコ、トリポリ、チュニジア）に所謂、年貢を支払ってきた。この歌はバーバリー海賊と勇敢に戦うプリンス・オブ・ウエールズ号を祝福して、CHARLES, DIBDIN という英国海軍の軍歌の作曲者が作曲したものである。また、もう一方の船の名前にプリンス・オブ・ルッター号が度々、出てくるが、これは遙かにもっともらしい、プリンス・ルパートの名前が訛ったもののようなのである。

II 歌詞の日本語訳

ハイ・バーバリーの海岸

古いイギリスからやって来た、2隻の堂々たる船があった。

どんなことがあっても、俺達は航行した。

一隻はプリンス・オブ・ルッター号、もう一隻はプリンス・オブ・ウエールズ号、ハイ・バーバリーの海岸に沿って、南下していった。

“マストの上に昇ってくれ、マストの上に、”陽気な甲板長が叫んだ。

“船首を見てくれ、船尾の方はどうだ。風上を見てくれ、風下はどうだ。”

“船尾には何もありません(甲板長!)、風下にも、です。

けれど、風上の方向に、堂々たる船が一隻航行しているのが見えます。

奴は早くて、追い風に乗ってます。”

“奴に合図をするんだ、合図を送れ!”、勇敢な船長が叫んだ。

“貴様の船は軍艦か、私掠船か、それとも商船か?”、彼は云った。

“こっちは、戦艦でもなければ、私掠船でもない、”相手は答えた。

“古参の海賊で、報酬を求めているんだ。”

俺達は相手の舷側に向けて長いこと停泊した。

プリンス・オブ・ルッター号が海賊船のマストを打ち倒すまで、

その時、あの海賊共が命乞いをしやがった、命乞いをさ。

けれども、俺達が奴らに出した答えは、全員奴らを海に

沈めてしまったことだ。

解説・日本語訳：宮崎多加雄

13 The Rio Grande

1. 歌の時代背景

“The Rio Grande”は最もポピュラーなシー・シャンティの一つです。たくさんのバリエーションがあります。

ところで、この Rio Grande はメキシコとテキサスの間の Rio Grande とは違います。この歌は、ブラジルの Rio Grande Do Sul と関係があります。この歌の、あるバージョンは“ゴールデン・サンド”に言及しています。ブラジルの Rio Grande の両岸は、高い砂丘があって、この地域には金が見つかります。18世紀に、金はブラジル南部で発見されました。金はまたメキシコの Rio Grande 地域でも発見されましたが、それはこの歌が既に一般に定着した後でした。この旋律は、キャプスタンないしウインドラス・シャンティで外国行きの歌でもありました。この歌の一つを作った Stan Hugill という人は、言っています。この歌は一般に、イングランド西岸やウエールズを出航する船の上で歌われました。これらの船は、しばしばニュー・ファウンドランドやカディズに停泊して、塩や塩の袋を求めたそうです。

2. 歌詞の日本語訳

なあ、お前達、リオ・グランデに行ったことがあるか？
リオに向かって、エイやこら、
ええ、お前達、リオの砂浜に立ったことがあるか？
わけは、今俺達はそのリオ・グランデへ向かおうとしてるからさ、
リオに向かって、エイやこら、リオに向かって、エイやこら、
俺のかわいい娘に別れの歌を歌ってやってくれ、
わけは、今俺達はそのリオ・グランデへ向かおうとしてるからさ、

ああ、ボストンの町は、俺にはちっとも似合わねえ、
俺はこれから荷物をたたんで、海へ出るのさ、
わけは、今俺達はそのリオ・グランデへ向かおうとしてるからさ、
リオに向かって、エイやこら、リオに向かって、エイやこら、
俺のかわいい娘に別れの歌を歌ってやってくれ、
わけは、今俺達はそのリオ・グランデへ向かおうとしてるからさ、

これ、ボストンの娘さん達よ、お前達に教えてやろう、
俺達は今から南の方へ向かうんだ、
おお、神様！あの娘も一緒に行かせてくれ、
わけは、今俺達はそのリオ・グランデへ向かおうとしてるからさ、
リオに向かって、エイやこら、リオに向かって、エイやこら、
俺のかわいい娘に別れの歌を歌ってやってくれ、
わけは、今俺達はそのリオ・グランデへ向かおうとしてるからさ、

さあ、これから俺達は、糖みつとラム酒の代わりに、少しばかりポップコーンを
売ろうぜ、

リオに向かって、エイヤこら、
そして感謝祭がやって来る前には、また家に帰ってくるさ、
わけは、今俺達はそのリオ・グランデへ向かおうとしてるからさ、
リオに向かって、エイヤこら、リオに向かって、エイヤこら、
俺のかわいい娘に別れの歌を歌ってやってくれ、
わけは、今俺達はそのリオ・グランデへ向かおうとしてるからさ、

俺のかわいい娘に別れの歌を歌ってやってくれ、
わけは、今俺達はそのリオ・グランデへ向かおうとしてるからさ、リオへね。

- 註) 1. away の訳を”エイヤこら”としたのは、別の Version で,heave away (綱を巻くときのかけ声) for Rio となっているのにヒントを得たためです。
2. ポストンをニューヨークに、ポップコーンを塩の袋に、それぞれ代えて歌っている Version もあります。

解説・日本語訳：宮崎多加雄

帆船日本丸男声合唱団用資料

№ 2-014

21 Goodbye Fare Ye Well

1. この歌の説明

このシャンティは、船が帰航する際によくうたわれた歌のひとつです。

ウインドラスやキャプスタン（何れも巻き上げ機）の設置してある場所で歌われました。

寄港地で親しくなった若い女達とも哀しい別れの時がやってきたが、一方で懐かしい故郷に帰ることが出来る嬉しさもある、と言った船乗り達の複雑な心の内が見えていて、とても哀感のある詩です。メロディーも静かで大変美しいものです。

多くのヴァージョンがあるのも特徴です。

“Homeward Bound”とか“Goodbye And Farewell”としても知られています。

2. この歌の日本語訳

さようなら、元気でな、さようなら、ご機嫌よう、
さようなら、さようなら、
達者でな、かわいい娘さん達、
喜んでくれ、おまえ達、おれたちはいよいよ帰航するんだ、

なあ、年寄りの云うことなんか聞くんじゃないぞ、
さようなら、元気でな、さようなら、さようなら、
俺達は、まさしく今日この日に帰航するんだ、
喜んでくれ、おまえ達、おれたちはいよいよ帰航するんだ、

俺達はいよいよ帰航するんだ、そして俺には街のざわめきが聞こえるよ、
さようなら、ご機嫌よう、さようなら、
さあ、キャプスタンを強く引いて、急いで回すんだ、
喜んでくれ、おまえ達、おれたちはいよいよ帰航するんだ、

錨は海底を離れ、帆はすべて張られた、
娘さん達よ、俺達はいよいよ出航だ、名残惜しいがお別れだ、
喜んでくれ、おまえ達、おれたちはいよいよ帰航するんだ、

さようなら、元気でな、さようなら、ご機嫌よう、
さようなら、さようなら、
おお、かわいい娘さん達よ、
喜んでくれ、おまえ達、おれたちはいよいよ帰航するんだ、
喜んでくれ、おまえ達、おれたちはいよいよ帰航するんだ、
さようなら、さようなら、さようなら、達者でいろよ、
さようなら、ご機嫌よう、

註； Fare ye well（道中、ご無事で）、bonny（美しい、きれいな）、hoorah（=hooray, hurrah, ばんざい）、homeward bound（帰航中に）、this very day（まさしく今日この日）、anchor's aweigh（錨が海底を離れて）、spin 'round（急いで回転させる）。

帆船日本丸男声合唱団用資料

解説・日本語訳：宮崎多加雄

№ 5-064